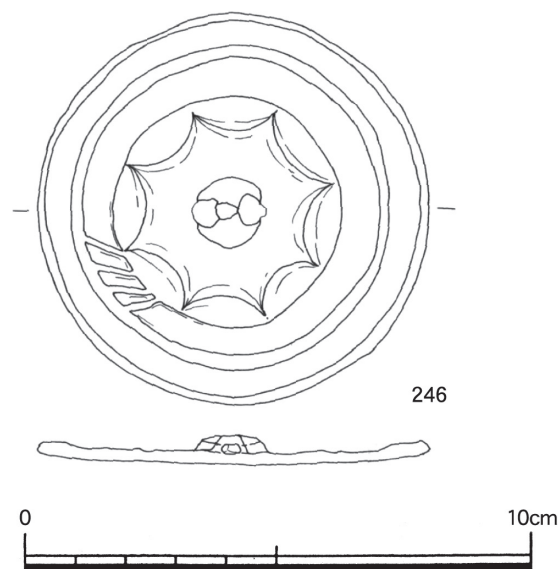


附編 山王遺跡第 16 次調査出土の小形仿製鏡について (九州大学 田尻義了)

本資料（第 20 図 154）は SE119 より出土した弥生時代後期に鑄造された小形仿製鏡である。現在の面径は 7.7 cm をはかり、文様構成は外側より縁—時計回りの櫛歯文—円圈—内行花文（浮彫 8 花文）—円圈—鈕であり内行花文系小形仿製鏡第 2 型 b 類に相当する。本資料の特徴は、文様の一部が不鮮明になっており、その箇所が鈕孔の方向と一致している。他の小形仿製鏡でも認められるこの様相は、湯口方向を示していると想定できる。これまで出土している小形仿製鏡の鑄型で、湯口と鈕孔が彫り込まれ位置関係が判明している資料（須玖坂本遺跡出土鑄型、ヒルハタ遺跡出土鑄型、井尻 B 遺跡出土）は、いずれも鈕孔の延長線上に湯口が設置されている。したがって、湯口を上にして鑄型を設置した場合、湯口に近い箇所の圧力が小さいため文様が不鮮明になり、湯口から離れた箇所の文様が鮮明に鑄出されと考えられるからである。本資料もこれまで出土している小形仿



第 27 図
小野崎遺跡出土鏡（高見淳編 2006 より）

製鏡と同様にそうした特徴が認められることから、同じような鑄型で製作された資料と判断できる。

次に本資料の類例について述べる。内行花文系小形仿製鏡第 2 型 b 類で面径 7.7 cm 前後、8 花文の鏡のうち、資料に類似しているのは熊本県菊池市に所在する小野崎遺跡から出土した小形仿製鏡である（第 27 図）。小野崎遺跡からは 8 面の小形仿製鏡が出土しているが、そのうち報告書で 246 とされる鏡に本資料は極めて近い。面径は 7.6 cm であり、文様構成は外側から縁—時計回りの櫛歯文—円圈—内行花文（浮彫 8 花文）—鈕である。鈕の周りの円圈が報告書では図化記載されていないが、表面がかなり錆で覆われており、本来は存在するのかもしれない。鈕孔方向と内行花文の配置位置も極めて類似しており、同范関係に近い鏡である可能性がある。今後、両者の鏡を詳細に検討する必要がある。

最後に、山王遺跡周辺の遺跡から出土した小形仿製鏡と本資料の比較である。山王遺跡周辺の近隣遺跡のうち、これまで小形仿製鏡が確認されているのは比恵遺跡第 91 次調査の現代攪乱孔より出土した資料である。比恵遺跡第 91 次調査出土鏡は内行花文帯が弧線で表現されていることから、山王遺跡出土の本資料より若干後続する段階の資料である。御笠川と那珂川にはさまれた洪積台地上では、その他に少し南に離れるが井尻 B 遺跡第 17 次調査より内行花文鏡系小形仿製鏡第 2 型 a 類が 1 面出土している。井尻 B 遺跡第 17 次調査出土鏡とあわせてみると、内行花文系小形仿製鏡を一定期間入手し続けていた様相が復元できる。

【第 27 図出典】

高見淳編 2006『小野崎遺跡』菊池市文化財調査報告第 1 集